みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

アラビアンナイト：ファンタジーの源流を探る

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2013-02-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 西尾, 哲夫 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/4799

第十回　12月2日（木）放送／12月3日（金）再放送

里帰りした物語集　中東世界のアラビアンナイト

アラビアンナイトの位置

アラブ文学と聞いても具体的な作品名をすぐに思い浮かべられる人は少ないでしょう。日本語への翻訳が進んでいないこともありますが、ナギーブ・マフフーズ（一九一一～二〇〇六）がノーベル文学賞を受賞したにもかかわらず、知名度という点では欧米文学とは比べものにならないほど低いのが現状です。

近代以前のアラブ世界には豊かな文学の伝統があったのですが、東洋の古典文学を収録している平凡社の東洋文庫には、アラビアンナイトを別にすると動物寓話（ぐうわ）『カリーラとディムナ』と中世の語り物『マカーマート』が入っているだけです。読者の中には『薔薇園（ゴレスターン）』や『ルバイヤート』を思いうかべる人もいるかもしれませんが、これらはアラブ文学ではなくてペルシア文学です。現代文学としてはかなり以前に出版された「現代アラ

ブ小説全集」（河出書房新社）がありますが、マフフーズ以外の作家はほとんど知られていません。

「現代アラブ小説全集」に収録されて日本に紹介された作品は、政治状況を反映して重いテーマをあつかったものが多いのですが、アラブ世界では深刻な作品ばかりが好まれているわけではありません。たとえばエジプトでは、毎年ラマダーンになるとラマダーン用のスペシャル番組が放映され、アラビアンナイトもテーマになっています。ナポレオンのエジプト遠征をあつかったシリアスな歴史映画『アデュー・ボナパルト』（一九八五、ユースフ・シャヒーン監督）にしても、ヨーロッパでの評価は高いのですがエジプト国内ではそれほど大きくとりあげられることはありません。エジプト映画史上、最も人気のある作品の一つで現在もよく話題になるのは『テロリズムとカバブ』（一九九三）と題する社会風刺に満ちたコメディーなのです。簡単に筋を紹介しておきましょう。

子どもの転校届けのためにモガンマア（カイロにある巨大な合同庁舎）を訪れた主人公、窓口をたらいまわしにされた挙句、どの担当者も長電話はするわ、お祈りはするわ、いつまでたってもトイレから出てこないわですっかり逆上してしまい、警官隊がつき出した小銃を思わずつかんでしまいました。とたんにわきあがる「テロリストだ！」の叫び。何が何だかわからないままテロリストにされてしまった主人公は、人質とともにモガンマアにたてこもるはめになってしまいます。日ごろから社会に不満を持っていた人たちが勘違いして勝手に加

勢してきたので、騒動はエスカレート。政府から連絡が入って条件を訊ねられた一同は、人質全員に最高級のシシカバブを要求します。犯人（？）一味と人質が大声で叫ぶ「カバブをよこせ！　さもなきゃ地獄！」のシュプレヒコールには誰もが笑ってしまうでしょう。

これだけの例で全体を俯瞰することはできませんが、アラブ世界でも古典文学として文学史に記載されるような作品と、民間で親しまれてきた作品は必ずしも重なりませんでした。特に文学に関して言えば、いわゆる純文学はアラビア語でアダブと呼ばれ、フスハー（文語）で書かれていることが絶対的な条件でした。先ほど挙げた『カリーラとディムナ』『マカーマート』はともに古典アラブ文学の代表的なアダブ作品ですが、アラビアンナイトはアダブではなかったのです。

物語集を編むということ——作者の不在

中世の辞書では、アダブとはすぐれた品性だとか人徳を意味していたのですが、やがて文化人たるにふさわしい教養を意味するようになり、最終的にはフスハーで書かれた典雅な文芸をアダブと呼ぶようになりました。アラビアンナイトは平易なアラビア語で書かれており、アラビア語初学者用のテキストに選ばれることも多いのですが、フスハーにアーンミーヤ（口語）が混じった文体が使われていますから、アダブ作品だとはみなされなかったのです。

ではどうしてアダブではないアラビアンナイトが、八世紀以後も伝えられていったのでし

ようか。それはこの作品が物語集という形をとっていたためだと思われます。

アッバース朝の時代には物語集を編むことが流行したらしく、第一回でふれた十世紀バグダードの書店主イブン・アンナディームによると、宰相の補佐役だったジャフシャーリーという人物が、アラブ、ペルシア、ギリシアなどの物語から話を拾ってきて千の話を集めようとしました。ジャフシャーリーは語り手たちを呼んできては話を聞き、物語集や寓話集からも適当な物語を選んでいったのですが、五百夜足らずを集めた段階で他界してしまいました。ジャフシャーリーが編んだ物語集は伝わっていないのですが、このような物語集はほかにもいくつかあったようです。

これらの物語集には大きな特徴がありました。つまりその物語集のために自分で話を創作するのではなく、口承、書承の違いはあっても、すでに知られている話を集めてくるというのが原則だったのです。シェヘラザードにしても本人が話を創ったわけではありません。枠物語には次のように書いてあります。

彼女（シェヘラザード）は学問に精進し、すぐれた記憶力を備えていましたから、今までに読んだ書は一字一句たりとも忘れることがなかったのです。シェヘラザードは哲学、医学、歴史、文芸などに通じており、当代一の詩人たちによる優美な詩句もそらんじておりました。（ガラン版より）

また、アラビアンナイトの本編には次のような一節が何度も出てきます。

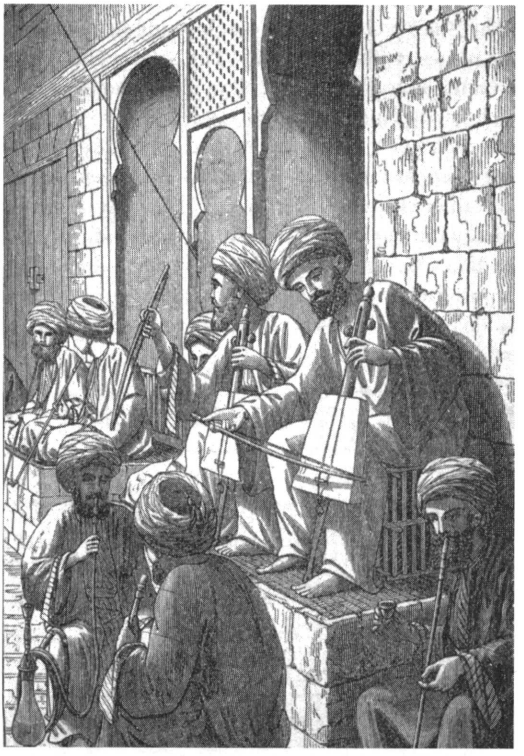
カリフさまはいたくおどろかれ、そなたが正直者であることを知らなかったら、とうてい信じられぬところだと続けられました。そしてわたしがこれまでにお聞かせした話はまことに不思議なものであるから、金の文字で記して宝物庫におさめるようにと秘書官にお命じになりました。（ガラン版シンドバッド航海記より）

つまり不思議な物語は記録にとどめて長く世に伝えるべきものだったのです。アラビアンナイトにあっては、作者がいないことこそが大切でした。アラジンやアリババなどのように、ディヤーブもしくはガランの創作ではないかという疑いが消えない話は、どれほど有名になろうとも外典としてあつかわれてきました。バートン版アラビアンナイトでもこれらの二篇は正編ではなく補遺に収録されています。

一方、シンドバッド航海記は、成立当時のアルフ・ライラ・ワ・ライラには含まれていなかった可能性が高いものの、写本の形で実在していますから、後期の編集作業では正統なアラビアンナイトとして採録されたのです。これはオリジナリティーが何よりも尊重される西欧の近代文学とは、正反対の状況であると言えるでしょう。

物語集としてのアラビアンナイトはいわば作品保存庫のようなものですから、正統な著者もいなければ正統な編集者もおらず、特定の編集版が定本化することもありません。誰であれ自由に物語を抜きとっていって新しい物語集として再編集することが可能でした。アラビアンナイトは誰の所有物でもないがゆえに、誰が所有してもよかったのです。

ブーラーク印刷所



カイロの職業的語り手。レイン『現代エジプト人の風俗習慣』より

アダブ作品ではなかったアラビアンナイトは、文学エリートからは冷遇されましたが、民間の講釈師のなかにはアラビアンナイトをレパートリーにしていた人たちもいたようです。実際の状況はほとんどわかっていないのですが、レイン版アラビアンナイトの著者が書いた『現代エジプト人の

風俗習慣』には、コーヒーハウスをめぐる記述があります。

レインによると、カイロには千軒以上のコーヒーハウスがありました。コーヒーハウスは通りに面しており、店の前にはマスタバと呼ばれる石やレンガで造った高さ数十センチの台があって敷物が敷かれていました。日本でいう縁台のようなものだと思えばいいでしょう。午後から夕刻にかけて集ってきた客はマスタバに腰かけて持参のタバコを楽しみ、祝祭日の夕刻などには、楽師や講釈師らがコーヒーハウスを訪れて芸を披露することもありました。

一八二五年から八年までカイロに滞在していたレインによると、講釈師らが語るのは、通俗物語詩であるアブー・ザイド武勇伝やモンゴル軍を撃退した歴史上の英雄スルタン・バイバルスの事跡を語ったバイバルス武勇伝でした。少し前には、詩人戦士アンタルの物語を語っていた人々がアラビアンナイトを語ることもあったらしいのですが、レイン自身はコーヒーハウスでアラビアンナイトが語られる場面を見たことはありませんでした。また、この当時のカイロでアラビアンナイトの写本を見つけることは、ほぼ不可能だったようです。

このように十九世紀初期のアラブ世界では、アラビアンナイトに注目する人はほとんどいなかったようなのですが、一八三五年にはブーラークの官立印刷所からアラブ世界最初のアラビアンナイト刊本であるブーラーク版が出版されました。

ブーラーク印刷所は、近代エジプトの祖とされるムハンマド・アリーによる近代化政策の一環として、ブーラークに開かれた官立の印刷所です。一八二二年に最初の出版物である

『アラビア語――イタリア語辞書』を出しましたが、ムハンマド・アリーの死後、民間に払い下げられました。ブーラーク印刷所の活動がもっとも盛んであったのは、開設から二十年あまりの期間であったとされていますので、内訳を確認してみましょう。

一八四二年までに印刷されたトルコ語、アラビア語、ペルシア語書籍合計二四三冊のうち、アラビア語の書籍は一一二冊。内容で最も多いものは文法書の二十一冊、次いで医学書十四冊、獣医学書十一冊、軍事書九冊です。文学関係としては、詩五冊と散文文学二冊が印刷されており、散文文学二冊のうち一冊は古典文学を代表するアダブ作品『カリーラとディムナ』、そして残る一冊がブーラーク版アラビアンナイトでした。

アダブとして尊重されてきた『カリーラとディムナ』はともかく、冷遇されていたアラビアンナイトが印刷された理由についてはよくわかっていないのですが、「アルフ・ライラ・ワ・ライラ！」と叫びながらカイロの大通りを歩きまわったというヨーロッパ人旅行者たちがいなければ、ブーラーク版が出版されることはなかったと思われます。

ブーラーク印刷所ではアラビア語とトルコ語による官製新聞なども印刷されましたが、所定の印刷費用を払えば民間人でも印刷をすることができました。印刷費用はかなりの高額でしたし、半額を前払いする必要がありましたから国外市場への輸出を前提にした投資目的の印刷が多かったようです。

アラブ世界の読書事情

ブーラーク印刷所が始動するまでのアラブ世界では、書籍は基本的に手書きの写本の形で読まれていました。アラブ世界で印刷術の開始が遅れたことについてはいくつかの理由がありますが、「印刷されたものなど信用できない」という考え方が強かったことが第一に挙げられるでしょう。

イスラームの中心となるのは聖典コーラン（クルアーン）ですが、コーランと同じくらい大切なのがハディースと呼ばれる預言者ムハンマドの言行録です。ハディースはムハンマドや教友たちの生活や言葉を実際に見聞した人たちの証言を伝えたものであり、誰それからこのように聞いたという伝承経路が重要になります。イスラーム法でも証文よりは証言に比重が置かれてきましたし、学問でも知識とは師から弟子へと直接的に伝えるべきものとされていました。平和な時期には、多くの人々が師をたずねて千里の道をたどったのです。

とは言うものの、モンゴル軍によって破壊される前のバグダードには万巻の書があったと言われ、かなりの数の貸本屋が軒を並べていたようです。アッバース朝を代表する文人ジャーヒズは、貸本屋を借り切っての読書三昧を楽しんだという話が伝わっており、最後には崩れてきた本の下敷きになって死んでしまったという伝説まで残っています。

近世の日本、イギリス、フランスでの読書事情は簡単に確認してきましたが、アラブ世界

ではどうだったのでしょう。その前にアラビア語について簡単に確認しておきましょう。アラビア語にはフスハー（文語）とアーンミーヤ（口語）の二つがあることは、前に述べたとおりです。NHKのアナウンサーの言葉と関西弁の違いくらいですめばいいのですが、本当に同じアラビア語かと思うほど異なっていますから、日本でフスハーを学んでカイロに行き、アーンミーヤの会話についていけずに泣きそうになったアラビア語学習者は少なくないでしょう。

ただしフスハーも時代につれて変化し、たとえば十七世紀のカイロでは都市中流層の成長にともなって、フスハーに日常語彙が数多く入ってくるようになりました。このため、フスハーからは縁遠かった人々が文書類に接する機会が格段に増えました。これと並行してヨーロッパから廉価紙が入ってきたこともあって書籍の数が急増し、価格も安くなったことがわかっています。この時代までの書籍は、基本的に学者や宗教者のためのものであり、製作も注文によっていましたが、十七世紀になると、経済的な余裕ができた一般庶民の家庭にも書籍が置かれるようになりました。中流層が何を読んでいたかはよくわかっていないのですが、指導的なスーフィー（修行者等）の著書などに人気があったことが確認されています。

ブーラーク版の親本となった写本がまとめられたのは、ちょうどこの時期と重なっていますし、方言が混ざった言葉で記されたウォートリー・モンタギュー写本にしても、先に確認したような状況のもとで作成された可能性があります。いずれにせよ、エジプトでは近代の

分岐点となるエジプト遠征に先だって、中流層の成長に伴う内部変化が生じていたことは確かでしょう。

現代のアラビアンナイト

ヨーロッパの影響を受けてアラブ近代文学が誕生したのは、一九二〇年代のことであるとされています。日本ではあまり知られていませんが、タウフィーク・アルハキーム（一八九八～一九八七）や、ターハー・フサイン（一八八九～一九七三）といったアラブ文学の大御所もアラビアンナイトに題材を求めた作品を残しました。最近では、ナギーブ・マフフーズの『シェヘラザードの憂愁』（河出書房新社）が出版されました。アラビアンナイトの登場人物が多数登場する『シェヘラザードの憂愁』にしても娯楽作品というわけではなく、深いテーマをあつかった文芸物ですが、現代のアラブ世界ではヨーロッパから逆輸入されたアラビアンナイトを自分たちの遺産として受けとめるようになっています。

アラブ世界でもアラジン、アリババ、シンドバッドに人気が集中しており、子ども向け絵本の定番となっています。アラブ首長国連邦ではアラビアンナイトをテーマとする切手がシリーズで発行されましたし、ファンタジーとしてのアラビアンナイト・イメージは観光産業でも積極的に利用されています。チュニジアのトズールにある私設のダールシュライト博物館にはアラビアンナイトをテーマにした一画があり、アラジン、アリババ、シンドバッドな

どの人形が置かれていますし、観光に力を入れているドバイにはアラビアンナイトという旅行会社もあります。また二〇〇六年にカタールのドーハで開かれたアジア大会では、開会式と閉会式でアラビアンナイトを題材にしたアトラクションがくり広げられました。

オマーンではシンドバッドはオマーン人だと信じている人が多いそうです。ところが、シンドバッドの生地については、スールとソハールという二つの都市が名乗りをあげています。どうしてこういうことになったのかはよくわからないのですが、一九八〇年に中国をめざしてダウ船で航海したイギリス人セヴェリンの冒険が事の発端ではないかという見方もあるようです。このセヴェリンの航海については、『シンドバッドの海へ』（筑摩書房）という題名で日本語にも訳されています。セヴェリンは、アラビア海を横断して中国をめざす航海を計画し、オマーンのスールからソハール号に乗って船出しました。一九八〇年十一月二十一日にスールを出航したソハール号は、翌年の七月六日に目的地の広東に到着したのです。大航海を終えたソハール号はオマーンに戻って展示船となり、今でもその姿を見ることができます。シンドバッド第八の航海とも言えるソハール号の冒険は、アラビアンナイトに新しい物語を書き加えたことになるのでしょう。